



# HOKKAIDO UNIVERSITY

|                  |                                                                                   |
|------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | 研究プラットフォーム委員会 : 活動報告                                                              |
| Citation         | 子ども発達臨床研究, 5, 59-61                                                               |
| Issue Date       | 2014-03-25                                                                        |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/54980">https://hdl.handle.net/2115/54980</a> |
| Type             | other                                                                             |
| File Information | AA12203623_5_07.pdf                                                               |



# 活 動 報 告





# 研究プラットフォーム委員会：活動報告

研究プラットフォーム委員会

## 1. 設立の経緯

2011年1月に「子ども発達臨床研究センターの今後のあり方を検討する委員会」（代表：田中康雄）は、『子ども発達臨床研究センターの今後の方向性について（最終報告）』（以下、『最終報告』）をまとめた。そこでは、「研究院全体が融合した組織体として参画可能な研究拠点としての位置づけをもつセンターの在り方」として、センターを「『発達支援学』へ向けた研究創生の『器』」とすることが提起されていた。

そのために、「従来の研究領域を超えた学際的・統合的な研究討議の組織化」と「発達支援に関わる『先端的実践』との協働によって、実践的な生命力を保持した新たな理論化」に挑戦すること、及びその具体化に向けて「発達支援実践者との協働研究を主として組織する交流実践分野」と「学際的な立場の研究者などが理論的考察を行う領域横断分野」を設けることが提起されていた。

このような方向性の下に、試行的に研究を組織化するために、子ども発達臨床研究センターに研究プラットフォーム委員会を設け、領域横断研究と交流実践研究を起動させることが提起され、2011年度から研究プラットフォーム委員会が発足した。

## 2. 2011年度の取り組み

上記方針に即して、領域横断研究は「総合研究企画」、交流実践研究は「支援者困りごとワークショップ（以下ではWSと略記）」として具体化することとした。

### (1) 総合研究企画：「遊ぶ・学ぶ・働く ― 持続可能な発達の支援のために」

2011年11月2・3・4日の3日間にわたり、講演・連続シンポジウム・対談からなる総合研究企

画を開催した。この企画は、1) 学校から排除された子どものサポートの遅れが顕著であり、教育と福祉の連続性も確保されていないという委員の現状認識、2) 2010年に教育学研究院内で検討された「早期離学に関する総合的研究」の主題の継承、を背景に組まれた。早期離学現象は高校中退に留まらず、幼児期から始まっており、就労後に至るまで同質の現象が確認できるため、テーマを「遊ぶ・学ぶ・働く」に変更した。

研究院からの報告者は1名に留まったものの、総勢11名に及ぶ報告者は、上記主題を鮮明にあぶり出し、研究領域を超えた共通主題が確認された（報告書刊行済み。北海道大学図書館 HUSCUP：<http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/handle/2115/49383>）。キーワードとして浮上したのが、人々を締め出すシステムの周辺に広がる非制度的・非定型的な領域の重要性であった。その領域にこそ、新たな発達概念を創出する可能性が広がっているにも関わらず、その対象化と理論化は今後の課題であることが確認された。この企画は、「発達支援学」の課題を、領域横断研究によって素描するとともに、そのような研究を組織する求心力の所在を示したと言える。

### (2) 支援者困りごとワークショップ

「発達支援学」は、アカデミズムに閉じることなく実践の世界と協働によりその力動性を担保する学として構想された。その保障装置が支援者困りごとワークショップである。各専門業界ごとに行われる研修とは異なり、このワークショップは対人支援に関わる「異業種」の支援者が構成する点に特色がある。したがって、その主題は各支援実践の専門的な検討や分析ではなく、支援領域を超えて浮かび上がる共通課題の検出にある。支援者の困りごとは、本質的には発達支援の課題設定

や方法をめぐるものであり、それが領域を超えて共有されることによって、個別領域のいわば縦系列の分析では必ずしも明らかにならない「メタレベルの発達支援」の課題を明らかにすることが試みられた。多様な実践の文脈が交差する空間を創出することが、方法的な留意点であった。

このような課題設定は、第一に、研究者が個別事例の調査によって明らかにし得る知見とは相対的に異なる質の問題発見、第二に、実践者と研究者が異質性や差異性を保持しつつ、それらを越境する概念(言葉)を探究することによる媒介的(=共有可能な)理論の創造を意図してなされている。

7月に第一回WSを開催し、10月にはその記録に基づく分析ミーティングを開催し、これも実践者に公開した。そこでは実践者に課せられた「支援」の枠が、支援実践の困難さと支援者間のコミュニケーションの困難さを生んでいること、特に「困難事例」では既存の支援枠組みが通用しないにも関わらず、それを対象化する術がどの職場にもないことが確認された。同時に、支援の「場」そのものを転換させる実践が必要となっていることが確認され、そのための試行の提案も出され、次回までに実践してみることとなった。

第三回WSは2012年3月に開催され、第二回WSで確認された課題についての研究者側からの応答、実践者から試行の結果の紹介がなされた。

### 3. 2012年度の取り組み

2012年度も前年度の課題を引き継ぎ、「発達支援学」の課題を明確にすることを意図して以下の取り組みがなされた。

#### (1) 総合研究企画：「生きづらさを超えて」

前年度の領域横断研究によって明らかになった「非制度的・非定型的」領域に潜む新たな発達の論理を明らかにすることが、今年度の課題となった。その領域は「生きづらさ」に満ちているとともに、新しいものを創発する可能性を秘めた領域でもあるという理解から、テーマは標記のように設定された。

同時に、その領域は教育・福祉・労働・政治等の諸領域が交差する空間でもある。このことは、前年度来の支援者困りごとWSでも、実践的なアリティをもって何度も確認されてきたことであった。研究企画は11月2・3日の両日にわたって開催され、計7名の報告者がこの主題を解明した。そこでは、「異交通」(栗原彬)が人間存在の根底を照射する可能性が語られ、それに応える形で福祉・教育の分野で制度的制約を超えて複数の実践のコンテクストが交差する実践のもつ可能性が具体的に語られた。教育・福祉・労働の連携の必要性は今日では誰もが口にするが、それを統合した地平に成立する教育実践の新たな質については必ずしも明らかにはなっていない。その課題に真正面から応えることを試みたのが、この総合研究企画であった(報告書刊行済み。北海道大学図書館 HUSCUP : <http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/handle/2115/52431>)。

#### (2) 支援者困りごとWS

2012年度は、WSの発展の方向性を探るために、7月にWS企画会議を開催し、支援者の参加も募った。そこでは支援の場の転換の具体的な方策を明らかにすることなどが課題として確認されたが、そのためにも、WSではいくつかのテーマを設定し、具体的な事例に即して各支援実践の経験を重ねることを試みることになった。このテーマも、研究者側で設定するのではなく、当日の参加者の討議に委ねることとし、8月に開催されたWSでは5つのテーマに即して主報告者の「困りごと」を読み解くという形式が採用された。

本年度のWSについては、研究上の位置づけをめぐる課題も明らかになった。年度当初は、昨年度確認された「メタレベル」の発達支援の課題が、個別的具体的な支援実践現場へどのようにフィードバックされるのかを検証する必要性が指摘され、各支援現場での「出前」型WSや中学校区単位での困りごとWSの開催という案が出されたものの、それを実行するまでの体制は取れないままに推移している。また、このWSは実践と理論

の双方にとっての共通の言葉を生み出す道具であるが、その道具性を明らかにするためのWS分析の課題も提起されている。これらの点の検討が現時点で浮上している課題である。

#### 4. 2013 年度

##### (1) 「発達支援学」の構想の具体化

以上の取り組みによって、個別的な研究領域あるいは実践領域に閉じない研究領域を設定する必要性と可能性は示されたように思われる。その可能性を現実性に転化させるための条件を一步步構築していくことが2013年度の課題となった。

そのための第一歩として、「発達支援学デッサン研究会」を開催し、基本構想のとりまとめの方向性を検討した。その結果、2014年3月に『Development 概念の転換——支援の困難性の背後にあるもの——』を開催することになった。

このシンポジウムは、発達・発展・開発と訳されるDevelopmentが現代社会で意味するものを心理学から社会学までの広範な視点から再検討することを目的としている。それは支援実践がめざすべきものを明確にするであろうし、また教育が現代社会において実現すべき価値を明らかにすることにもつながることが期待される。

2014年度は、このシンポジウムの主題に関わる

大学院講義も行われる予定であり、院生も含めて、新たな理論的挑戦の課題を深め、その成果をとりまとめる予定である。

##### (2) 支援者困り事 WS

本年度はこのWSが実践者と研究者の協働研究として有する意義をより明確にすることが課題であった。依然として試行が続いているものの、本年度は実践の省察とそれに基づく発展条件の創発機能を高めるために、様々な領域の支援の困難性の共通要因である「家族の変容」の問題をテーマとし、分析的な検討が行わるワークショップを開催することにした。但し、開催日が4月にずれ込んだため、開催年度は2014年度となる。

##### おわりに

研究プラットフォーム委員会では、以上の活動によって「発達支援学」の基本構想の素描が描かれたと評価し、次年度の子ども発達臨床研究センターの部門再編に伴って、本委員会は発展的に解散することとした。今後は、新たな第一部門の下に、これまでの機能を引き継ぎ、センター全体の研究として具体化を図ることしたい。

(文責：宮崎)